

哲学対話教育の手法を用いた道徳教育プログラムと教材の新たな開発

宇佐美公生・室井麗子・大森史博*，板垣健**

*岩手大学教育学部，**岩手大学教育学部附属小学校

(平成28年3月2日受理)

I. プロジェクトの背景および概要

本プロジェクトは、マシュー・リップマンが提唱・実践する「子どものための哲学」を一つの契機に世界中に広まりつつある「対話を通して思考力を深める教育プログラム」としての哲学教育の試みを、道徳教育の方法として活用することを目指すものである。本プロジェクトの主な目的は、道徳をめぐる諸問題について子どもたちが主体的に考え、対話し、探求することを通して、道徳性を自分自身のものであるものとして涵養するための教育プログラムを開発することにある。

周知のとおり、小・中学校における道徳教育が「特別の教科 道徳」として教科化されることがすでに決定されており、小学校では2018（平成30）年度から、中学校では2019（平成31）年度から完全実施される予定である。それに先立ち、2015年3月に学習指導要領が一部改正され、『小学校学習指導要領』総則に記載されている道徳教育の目的が変更された。「道徳教育は、(...) 自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする」と改定され、「考える道徳」という点が、新たに道徳教育の目標に盛り込まれた⁽¹⁾。

「子どものための哲学教育」の手法である哲学対話は、このような道徳教育の目標に応える方法になり得るのではないか。このような問題意識のもと、本プロジェクトは、平成26年度学部GPプロジェクト「子どものための哲学教育を介した道徳教育プログラムの開発」⁽²⁾を、継承・発展させ、下記の2つの課題を立てて、同メンバーで研究・実践を遂行することとした。

- (1) 道徳的信条の育成や徳目の涵養を旨とするこれまでの道徳教育の教材、例えば、道徳の副読本に掲載されているような教材が、必ずしも哲学対話に向いているとは限らない。そこで、「考える道徳教育」を実現すべく、子どもたちが道徳的事柄や問題について主体的に考え、対話し、探求し合う活動を触発し促進するような、哲学対話に適した教材を考案する必要がある。
- (2) 哲学対話は、テーマによっては、慣習化した徳目の自明性への問い直しや、それへの反省・批判を促進し得るものである。それゆえ、学校における既存の道徳教育と、哲学対話を用いた道徳教育との関係性を、再検討・再構築する必要がある。

II. プロジェクトの実施状況

1. 哲学対話のための教材開発—教職実践演習「学習の指導：道徳」

今年度は、上記(1)「哲学対話のための教材開発」を中心課題として、実践・研究を進めた。

道徳教育の新たな方法として本プロジェクトが注目する哲学対話は、古代ギリシャの哲学者ソクラテス(前470/469-399)を始祖とするものである。ソクラテス自身は、哲学教育は語られた言葉による生きた対話によって行われるものだと考え、著作、すなわち「教材」のようなものは否定しており、周知のとおり、書くことも書物を残すこともなかった。ソクラテスの哲学は、弟子プラトン(前427-347)の著作によって伝えられることになるのであるが、プラトン自身も、その教育観を描いた『国家』第7巻の「洞窟の比喻」の中で、洞窟の奥壁に映る影という喩えを用いて⁽³⁾、「教材」に対する批判的立場を継承している。

このように、哲学教育においては教材を批判するという立場が伝統的に見出されるのであるが、他方で、コメニウス（1592-1670）が、世界と言語を学ぶための子どもの教材（教科書）として『世界図絵 *Orbis Pictus*』（1658年）を作成して以来、教材は、教育実践において重視されるものともなった。子どものための哲学教育についても、リップマンを始めとする子どもの哲学教育の理論家や実践家たちによって、今日、多くの哲学対話のための教材が開発されている⁽⁴⁾。本プロジェクトはこの立場を踏襲し、昨年度のプロジェクト実施を通して見えてきた「従来の道徳教育の教材のように規範を補強・強化するものではなく、子どもたちの問いや対話を活性化し、かつ、その「羅針盤」となり得るような教材」⁽⁵⁾の開発という課題を、平成27年度の主たる課題として取り組むこととした。

上記の課題に取り組むべく、平成27年度の教職実践演習「学習の指導 道徳」において、哲学対話のための教材考案を主な目的として、受講生に「道徳の時間」の授業を立案してもらい、模擬授業・考察を実施した。

（1）教職実践演習の流れ

まず、（1）受講生とともに、「子どものための哲学教育」や「哲学対話」が提唱されるに至る歴史的背景や、その理論的ポイントについて確認した。特に、子どもたちの哲学対話を促進し保障するためにリップマンが提唱する「探求の共同体」について、次の点を確認した。この共同体では、①正しい答えが問題なのではなく、正しい問い方が問題とされる、②異なる意見のぶつかりよりも、問いを深めるための協力が求められる、③相手の話すことをよく聞き、理解し、確認するための相手本位のスキルを形成することが重要である⁽⁶⁾。また、このような共同体で哲学対話を実施する際の、教師の役割も確認した。①教師は、子どもたちの対話をキャッチし、それを哲学のテーマにして子どもに投げ返すという役割を担う、②哲学対話では、テーマは明確であるが議論の収束点は設定されておらず、子どもたちの多様な考えは否定

されることなく、教師は子どもたちが問い続けることができるように手助けをする、③教師は、子どもたちの自由な発言がテーマの深化へとつながるよう、適宜、適切な質問や確認を行う、という役割である⁽⁷⁾。

これらを確認した上で、（2）3～4名ずつ3グループ（A～C）に分かれ、グループごとに教材を考案し、道徳の授業を立案・指導案を作成し、（3）模擬授業を実施し、（4）模擬授業の検討会を行った。

（2）教材考案・授業立案にあたっての条件および留意点

教材を考案し、授業を立案・指導案を作成するにあたって、予め、以下の条件を提示した。①小学校での道徳の授業であること、②『小学校学習指導要領』で提示される「内容項目」を取り上げること、③副読本等、道徳の授業用の既存の教材は用いず、自らで教材を探す、あるいは考案すること。

特に、教材を考案するにあたって、哲学対話の内容や方向性や流れを予め規定するようなものではなく、子どもたちの自由な対話を触発し促進し活性化させ、子どもたち自身による問いを深化させるようなものを選択ないし考案するよう、指示した。以下、各グループの授業内容を概括する。

① Aグループの授業

Aグループは、「セクシャル・マイノリティ」をテーマとして取り上げ、高学年を対象に、内容項目「2-（2）だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする」を選択し、授業を立案し、実施した。

主たる教材としては、「男女のカップルの結婚写



写真1

真]、「男性同士のカップルの結婚写真」、「女性同士のカップルの結婚写真」を用いた(写真1)。「人を好きになるとはどういうことだろうか?」という問いを出発点に、「どんな人を恋人にしたいか?」「同性同士で恋心を抱くことはあるか?」「同性同士が結婚するとは?」など、様々な見解が提示され、問いが展開された。対話や問いが展開されるなかで、女性同士のカップルに対するインタビュー記事や、同性愛に否定的な政治家のツイッター等、上記以外の教材も提示された。出された問いや意見は、板書としてまとめられた(写真2)。

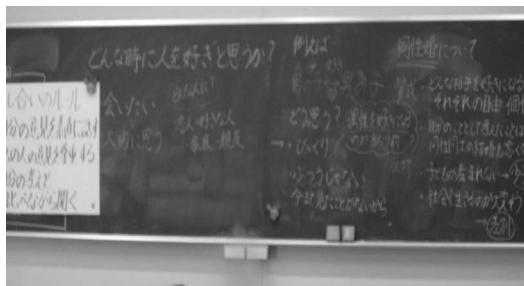


写真2

② Bグループの授業

Bグループは、「大人になるとはどういうことか」というテーマを取り上げ、第6学年を対象に、内容項目「1-(3) 自由を大切にし、自立的で責任ある行動をする」を選択し、授業を立案し、実施した。

主たる教材としては、「子どもから大人までの成長過程を図示したもの」(写真3)、「様々な国の飲酒可能年齢を示した表」、「少年に死刑が求刑された新聞記事」等を用いた。「いつからが大人なのか?」「“成人”ということでは20歳からか?」「飲酒、喫煙が可能になったら」「国によって飲酒・喫

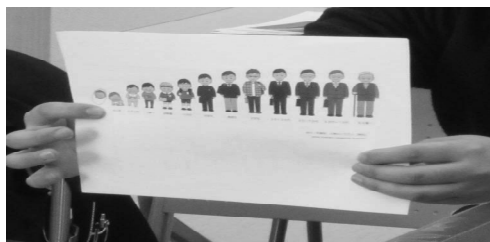


写真3

煙可能年齢は多様である」「年齢で大人と子どもの線引きができるか?大人を定義できるか?」「そもそも大人とはどのような存在なのか?」「経済的に自立することが大人なのか?」「子どもを産むことができる大人なのか?」「責任を持てる」「では、

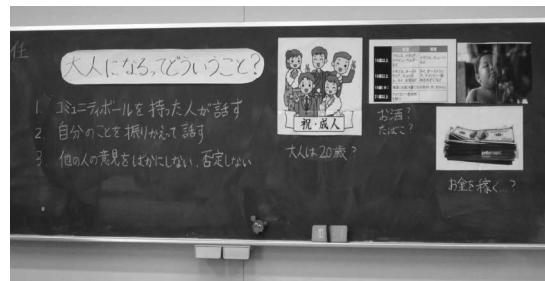


写真4

責任とは?」等、教材の提示を通して、このような問いや対話が展開された。出された問いや対話は、その展開が板書として明示された(写真4)。

③ Cグループの授業

Cグループは、「生きることの素晴らしさを知り、生命を大切にするを哲学対話をとおして考える」というテーマで、第2学年を対象に授業を立案し実施した。

Cグループが用いた教材は、「赤ちゃん」と「おじいさん」の絵のみである(写真5)。「おじいちゃんはこれからどうなるのか?」という問いを出

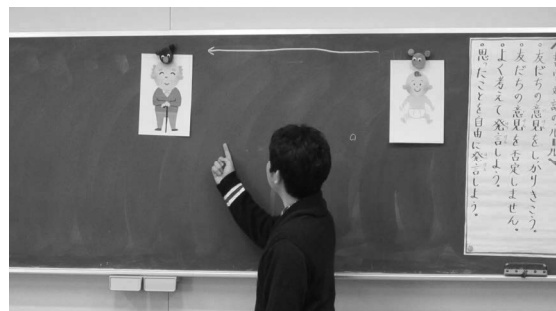


写真5

発点に、「ずっとは生きられない」「死ぬとはどうなることか?」「死にどのようなイメージを抱いているか?」「生きるとはどのようなイメージか?」「どういう時に生きていて楽しいか?」「生きている時の悲しいと死んだ時の悲しいは同じか?」等の問いや対話が展開された。これらの問いや対話は、流れが明確なるように板書にまとめられ明示

しもの時に備えるため」、もしもの時とは「地震や火災、津波、不審者対応など」といった問いや対話が展開された。

「勉強するため」と用紙に記入した児童に対して投げかけられた「勉強とは？」という問いから、勉強とは、国語や算数といった教科だけでなく、「日常生活で使うこと」や「社会に出た時に必要な力」を習得することである、といった意見が出された（写真8）。

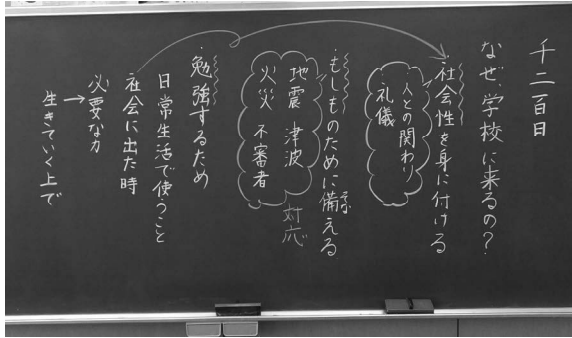


写真8

③むすび

対話を明確に結論づけることはしなかった。最後に、明確に答えが出せない事柄について、今後対話を続けていこうと、参加者全員で確認をした。

(3)「のびのび道徳」の検討・課題

「のびのび道徳」の実践から見えた第一の課題は、子どもたちを、どのようなきっかけから、どのように哲学対話に導き入れるかという点である。子どもたちに唐突な印象を与えないようにすることが重要であり、子どもの日常的な出来事に関連した導入を設定する必要がある。

第二に、子どもたちが問いを出し合いながら自分たちで問いをつなぎ、それを通して自分たちで問いを深化させるためには、そのような対話プロセス自体に、まずは慣れる体験が必要である。その際、教師には、受容的な態度と、そのような対話を可能にする学級づくりが求められる。

「問いをつなぐ力」の習得は、道徳のみならず、各教科にも有益なものである。そして、個々人だけでなく、学級全体で問いをつなぐという集団的な力を習得することは、各人と学級の双方の思考

の深化を促すといえるであろう。

Ⅲ. 平成28年度のプロジェクト実施計画

本プロジェクトは平成28年度も継続して遂行する予定である。課題(1)については、教職実践演習での模擬授業実施を通して明らかになった具体的な課題を踏まえつつ、道徳教育としての哲学対話に適した教材の開発・導入方法の検討をさらに進めていく。課題(2)については、附属小学校での哲学対話の実践を継続し、その考察・分析を通して、既存の道徳教育の枠組みの再検討および再構築を試みる。

註

- (1)『小学校学習指導要領』(平成20年3月告示,平成27年3月一部改正), URL:http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/_icsFiles/afieldfile/2015/03/26/1356250_1.pdf
- (2) 宇佐美ほか, 2015年。
- (3) プラトン, 1979年, 94-107頁。
- (4) 河野, 2014年, 149-155頁; 河野ほか, 2015年。
- (5) 宇佐美ほか, 2015年, 60頁。
- (6) 森田, 2011年, 245-254頁; cf. リップマン, 2014年。
- (7) 森田, 2011年, 229-231頁。
- (8) cf. 矢野, 2014年。

引用・参考文献

- 今井康雄「第5章 メディア—教育をささえるもの」、田中智志・今井康雄編『キーワード 現代の教育学』東京大学出版会, 2009年。
- 宇佐美公生・室井麗子・大森史博・板垣健「子どものための哲学教育を介した道徳教育プログラムの開発プロジェクト」、『教育実践研究論文集』(岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業), 第2巻, 2015年。
- 河野哲也『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』河出書房新社, 2014年。
- 河野哲也・土屋陽介・村瀬智之・神戸和佳子『子どもの哲学—考えることをはじめた君へ』毎日新聞出版, 2015年。
- コメニウス『世界図絵』井ノ口淳三訳, 平凡社, 1995年。

プラトン『国家』(下), 藤沢令夫訳, 岩波文庫, 1979年。
森田伸子『子どもと哲学を—問いから希望へ』勁草書房,
2011年。

矢野智司『幼児理解の現象学—メディアが開く子どもの生
命世界』萌文書林, 2014年。

M. リップマン『探求の共同体—考えるための教室』河野
哲也・土屋陽介・村瀬智之監訳, 玉川大学出版部, 2014
年。

『小学校学習指導要領』(平成20年3月告示, 平成27年3月一部改正),
URL:http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/_icsFiles/afieldfile/2015/03/26/1356250_1.pdf